

## 「探検・発見・ほっとけん～西海の魅力を五感で感じる～」

団体名 STAR☆ACT

代表者名 藤本 竜希

執筆者：藤本竜希

### はじめに（背景・目的・目標）

STAR☆ACT の活動目的は以下の通りである。

第一に、地域主導により地域特有の地域資源の継承を促進していくことは重要である。

第二に、学生主導により主体性・責任感を持って「ほっとけん」の提案の実現に向けた実践を行うことで、学生自身が創造性や自信を身につける。

第三に、廃校施設の有効活用において、学生ならではの面白い発想を実践することで、社会的にインパクトのある成果が得られれば、志賀町のみではなく他地域での応用が可能である。

この活動を通して、参加した学生は地域課題の解決に向けて、課題解決能力を得ることができ、地域の方々には地域資源の活用を通して地域への誇りの醸成ができ、住み続けるための意識向上が見込める。

### ● 活動内容

STAR☆ACT におけるこれまでの活動内容として、「探検・発見・ほっとけん」というテーマを掲げて廃校施設の有効活用を実践している。

第一に「探検」として、地域の歴史的背景や地域の特色を明らかにし、第二に「発見」として、地域の方々の中で次世代への継承が望まれる地域資源を発掘し、第三に「ほっとけん」として、若い外部者の視点から提案し、実際に実施させてきた。他の学生団体は、課題の発見、提案までは行うが、実際に実践するものは少ない。

上記を踏まえて、STAR☆ACT では、「ほっとけん」を重視し、他の学生団体とは差別化し、提案の実現に向けた実践を行うのが最大の特徴である。2018年度の活動は、石川県志賀町西海地区に立地する旧西海小学校において、廃校施設を活用して新たな交流人口の創出につながる活動を行ってきた。交流事業

(TOGIX2018) の計画づくりにおいては、学生主導と地域主導の二本柱で地域資源の有効活用を実践している。

TOGIX2018 における地域資源の活用は、増穂浦海岸で採れるさくら貝を使ったアクセサリーをはじめとして（写真1）、体験型観光プログラムとして、釣り体験、ぶどう狩り体験（写真2）、新しい企画として地元の食材を使用した手ぶらでバーベキュー、参加型イベントのモニュメント作り、家族向けのミニゲーム、プラバン・バルーンアートなどを計画し実践された。STAR☆ACT が中心となって行われた活動は、当該プロジェクトの計画策定段階から評価段階までの一連の活動プロセスと上記の体験型観光プログラムの計画・運営である。



写真1  
さくら貝工房  
での活動風景



写真2  
ぶどう狩り体  
験の活動風景

### ● 成果、結果の考察

TOGIX2018 では、多くの地元企業（スギヨファーム、てらおか風舎、西海水産等）に協力を得ることができたのが成果の一つである。これまでに協力を得ている企業（テレビ金沢、北國新聞社、Faavo 石川等）にも引き継ぎ協力を得ることができたことも

成果であった。その結果、学生側が新たなことを行うチャンスとなり、地域特有の地域資源を活かした活動と実践を行うことができた。

地域主導の計画において、西海地区特有の地域資源でもある「又次節」を実際に学生が体験できたことは、地域がこえまでに大切にしている地域文化に触れることによって、学生にとっても大きな学びになり、そして何よりも地域の方々との交流の場になった（写真3）。普段ではなかなか体験できないことを、実際に体験させてもらうことによって、地域資源に対して新たな発見があった。



写真3  
又次節への参加

TOGIX2018 で新たに計画された「手ぶらでバーベキュー」は来場者に対して質問紙調査を実施したところ、高い評価を得ることができた。学生側が考えて出した案が成功したことにより、大きな自信にもつながったように思われる。来場者が「食」といった一番身近な地域資源に触れてもらえたことで評価を得たのだろう。



写真4  
テレビ金沢の生中継

一番大きな成果としてあげられるのが広報活動である。学生自らビラを配り、志賀町役場や区長はじめ自治会の方々の協力を得て、回覧板に TOGIX2018 のチラシを挟んで広報活動を行うことができた。また、新聞社やテレビ等での広報活動も行った。TOGIX2018 の前日にはテレビ金沢の生中継(写真4)にも取り上げられ、テレビをご覧になった方々にも実際に会場に来てもらうことができた。

## ● 今後の課題、展望

TOGIX2018 の課題として、年度はじめからのスタートダッシュが肝心である。学生自身が STAR☆ACT の活動目的や内容に関する理解能力が求められる。また、リーダーには他者よりも負荷がかかるため、他の学生メンバーからの協力が必要になる。当該プロジェクトに対して、学生側の理解が遅れてしまった場合、地域側への対応が遅れが生じてしまう。つまり、参加学生全員が当該プロジェクトを理解する必要があり、誰か一人でも問題意識が欠けていると全体計画や運営上に遅れが生じてしまう。よってリーダーがいち早く計画目的や内容を理解し、他の学生メンバーへ伝えられるかがポイントである。

加えて、学生メンバー間におけるインセンティブや計画の方向性はさまざまであったため、全員が自身の考え方等を言い合える仲になることが重要である。仕事量に偏りができ、負担がかかったメンバーがでてくるので公平性の観点から、これは大きな課題になる。ここで全員が問題意識を持ってプロジェクトを進めることが肝要である。

地域側との連絡を取り合う際は、メールや LINE でのやり取りは極力避けたほうが良い。距離があるため難しいことではあるが直接会って話すかせめて電話で話し合うことが重要である。

今後の展望として、まず新規メンバーを募集する必要がある。地域側からは、当該プロジェクトを継続していくことを要望されている。こうした域学連携による協働型まちづくりの展開において、計画策定段階から実施までかなりの時間を要するため、継続する難しさや大切さはすぐに理解できる。よって学生側もプロジェクトを通じて得られる能力や経験は大きい。学生が主体性をもって行えることは口で言ってもなかなか実現できないことなので、何か新しいことにチャレンジしたい学生は行動すべきだ。

今年度における STAR☆ACT の取り組みは、「ほっとけん」をキーワードに志賀町西海地区を対象とした。全国各地には西海地区と同様の地域課題を抱えた場所は多く存在する。そのため、この経験を活かして他地域での応用も考えていきたい。